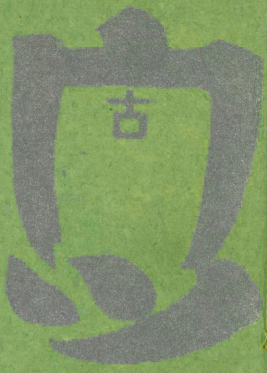
平家女護島二段目の切

鬼界ヶ嶋の段



謹ンデ昭和五年ノ新春ヲ迎ヘマシタ事ヲ祝福致シ舛。愈々新文樂座モお
蔭ヲ持テマシテ竣成致シ元旦ヨリ目出度初日ヲ開ケマシタルハ何共申シ
様ナキ嬉シサデ御座イマス。此ノ郷土藝術ノ殿堂第壹回興行ニ何カ古淨
瑠璃ノ内ヨリ皆様方ノ御耳新シキ物ヲトノ御進メニ依リマシテ何角ト考
エマシタル處アタカモ本年ノ御勅題(海邊ノ巖)ニ因ミ平家女護嶋鬼界ケ
嶋ノ段ヲ復活スル事ニ相成リマシタ

是レハ近松門左衛門翁六十七歳ノ作(今去二百十三年前)享保四年八月十
二日初日ニテ竹本座ニ書卸シ初代竹本政太夫師后ニ二代目義太夫ヲ襲名
致サレ後年竹本播磨少椽藤原喜敎ト受領セラレマシタ名人ガ床ニカケマ
シテ以來安永元年八月(今去百五十九年前)仝ジク竹本座ニ於テ初代竹本
綱太夫師ガ語ラレ此時大々ノ好評デアリマシタ事ヲ高名集ト申ス小冊子
ニ書イテ御座リマス。其ノ後初代竹本彌太夫師。及ビ。竹本磯太夫師此
ノ御方ハ二代目竹本彌太夫ヲ相續セラルヽ夫レヨリ四代目竹本染太夫師
五代目染太夫師。六代目染太夫師ノ語ラレシ後ハ永ラク中絶致シテ居リ
マシタ處明治二十三年十月一日初日ニテ御靈文樂座ノ立春姫小松ノ中ニ

加エマシテ二代目竹本長尾太夫師ガ語ラレマシタ夫レカラ本年迄四十ケ年モ打チ絶エテ居リマシタルヲ久方ぶりニテ新ラシキ文樂座ノ初舞臺ニヲコガマシクモ私シガ語リマスル事ニ相成リマシタ。サテ平家女護嶋ノ全段ノ内容ワト申シマスルト平重衡南都燒討ヨリノ凱旋ニ筆ヲ起シ清盛暴横ノ極『俊寛ノ妻あづまや』『丹波少將成經ノ情人蜑ノ千鳥』ヲ虐殺セシたたりニテ熱病ニ掛リ悶死ノ事。鬼界ケ島流人ノ生活模様其ノ赦免歸路ノ狀。牛若女裝シテ常盤ノ館ニ入リ込ミ共々心ヲ合セテ源氏一味ノ徒ヲ糾合スル事。宗清父子ノ苦節等ヲ叙シ文覺源氏ノ蜂起滅亡ノ經路ヲ夢ムト云フ條デアリマス

此ノ度上演ノ鬼界ケ島ノ段ハ全狂言ノ二段目ノ切デ俊寛鬼界ケ島ノ人間苦ヲ見セタ物デ流人生活ノ寂寥ニ蜑ノ千鳥ノ色氣ヲ加エタ處淨曲ノ妙味デアリマス

卽チ平家ヲ亡サントノ陰謀露見シテ清盛ノ爲メニ島ニ流人ノ身ト成ッタ成經。康頼。俊寛ノ三人ハ明ケクレ都ノ音信ヲ待チ詫ビテ淋シイ月日ヲ送ッテ居ル處エ都カラ京家ノ武士瀨之尾太郎兼安。丹左衛門尉元康ノ兩人中宮御産ノ御祈禱ニ就イテ赦免狀ヲ携エテ島ニ船ヲ寄セタ、夫レニハ俊寛ノ名ガ洩レテ居タガ小松内府重盛ノ計ラヒデ俊寛モ赦免ト成ッテ嬉ビ勇ム然ルニ成經一人浮カヌ顔ヲシテ居ルハ島デ契リシ蜑ノ千鳥ト別レルノガ切ナイノデアル瀨之尾ガ千鳥ノ乘船ヲ拒ムノデ俊寛ハ怒リテ是ヲ斬ッタガツク〳〵思エバ都ニ歸ッタ迚一家離散シ最愛ノ妻あづまやモ清盛ノ爲ニ殺サレシ事ヲ聞キ浮世ニ望ミナキ身。我ガ身ニ代エテ千鳥ヲ成經ト共ニ都ニ遣リ自ラハ永シエニ島ノ流人トシテ殘ルト言フノガ此ノ段ノ内容デ御座イマス

尤モ此ノ頃良ク出版致サレマス各近松全集物之中ニハ此ノ平家女護島ハ書イテ御座イマスガ當度新築初開場紀念興行ニ不肖儀久方振リニテ上演致シマスルニ附茲ニ此ノ小本ヲ作製シ江湖之諸彦ニ御謁讀ヲ希ヒ以テ御指導ト御批判ヲ仰ギマシテ今後ノ參考ニ供シ度イト存ジマス

尙本文中薩摩言葉トモ申シマスカお國なまりガ處々ニ御座イマスノデ其ノ注釋ヲ加エテ置キマシタ宜敷御判讀願ヒマス

昭和五年初春

豐竹古靱太夫

謡曲俊寛

鹿ヶ谷ノ陰謀破レ鬼界ヶ島ヘ流サレ居タル流人之中成經康頼二人ノミ赦免セラレ俊寛一人島ニ殘サレタル時ノ哀レ成ル様ヲ作レリ古別名ヲ（俊寛僧都）（鬼界ヶ島）（鬼海ヶ島）（硫黄ヶ島）ナド云ヘリ

孤島ニ沈淪セル俊寛ノ悲歎ト憔悴トヲ表トシ其裏面ニハ雄僧ノ氣慨時ニ其光ヲ放タントスル趣ナカル可ズ此両面ヲ備ヘテ始メテ曲ノ精神ヲ得タルモノト言フベシ

○俊寛ハ

源大納言雅俊ノ孫法印寛雅ノ子僧都（僧正ニ次グ僧官）ニシテ法勝寺ノ執行タル大納言成親平氏ヲ倒サント謀タリシ頃俊寛成親ノ許ニ有シ鶴ノ前ト云フ上童ニ通ヒ女子ヲ儲ケタル事ナド有テ此謀ニ加ハリシ事源平盛衰記長門本平家物語ナドニ見ユ鬼界ヶ島ニ流サレシハ治承元年康頼成經赦サレシハ同二年俊寛一人殘リテ翌年三拾七歳ニテ此島ニ死ス

○丹波ノ少將成經ハ

藤原成親ノ子右近衛ノ少將ニシテ丹波ノ守タリシカバ丹波少將ト稱セ

ラル父大納言成親ガ源行綱平康頼僧西光等ト法勝寺ノ執行俊寛ガ鹿ケ谷ノ別荘ニ會シ平家ヲ滅サント謀リタル罪ニ座シ治承元年六月俊寛康頼ト共ニ硫黄ケ島ニ流サル赦免ノ時廿二

○平判官康頼

平頼季ノ子検非違使尉タリシカバ平判官ト稱セリ硫黄ケ島ニ流サレシ時周防室積ニテ出家シ法名ヲバ性照ト云ヘリサレバ入道ト云フ

○鬼界ケ島ハ

薩摩ノ沖ニアル南嶋ノ稱名長門本平家物語ニ鬼界ハ十二島ナレバ口五嶋ハ日本ニ從ヘリ奥七嶋ハ未ダ我朝ニ從ハズト云ヘリ口五嶋ノ内丹波ノ少將ヲバ三ノトマリノ北硫黄ケ島ニ捨テ置キ康頼ヲバアコシキノ島俊寛ヲバ白石ガ島ニゾ捨置キケル（中略）セメテ一ツノ島ニモ捨テラレタラバ慰ム方モアルベキニ（中略）マシテ所々ノ思イイカニシテ一日片時モ日ヲ送ルベキト泣ケリ兎角シテ俊寛モ康頼モ少將ノマシ〳〵ケル硫黄ケ島ニタドリ着キタガイニ血涙ヲゾ流シケル云々

○硫黄ケ島ハ

神ヲ齋フトイヽカケタリ硫黄ケ島ハ鬼界ケ島ノ中ニ薩摩潟ノ西南ノ沖ニアル小島也平家物語ニ島ニハ人稀ナリケリ自ラ人ハアレドモ衣裳ナケレバ此土ノ人ニモ似ズ言フ詞ヲモ聞キ知ラズ身ニハ頻ニ毛生ヒツヽ色黒クシテ牛ノ如シ（中畧）島ノ中ニハ高キ山アリトコシナヘニ火燃ヘ硫黄ト云フモノ充チ滿テリカルガ故ニコソ硫黄ケ島トハ名附タレ云々

○中宮御産之御祈ハ

中宮トハ清盛ノ女高倉天皇ノ后建禮門院也安徳天皇生レサセ給フ時御産平安ノ御祈様々有シ事諸書ニ出ズ

○非常ノ大赦ハ

特典ヲ以テ囚人ノ罪科ヲ赦ス事、常、大、非常、ノ三種ニ別チ非常赦ハ大罪ノ者ヲモ赦スノ例也

○流人ハ

流罪ニ所セラレタル人古、近流、中流、遠流、ノ三種也

○配所ハ

罪人ノ流サレタル場所

○法勝寺ハ
俊寛ノ執行タリシ寺名舊跡山城愛宕郡岡崎村ニアリ
○彭祖(ホウソ)七百歳ハ
此事大平記龍馬進奏三事ノ條ニ悉シ曾我物語ニハ慈童ト云シ仙人菊水迎覧ビケルモ此ノ酒ナリ是ハ法華經普門品ノ二句ノ偈ヲ聞キシ故ニ菊之下行水不死ノ藥ト成ケルヲ此仙人ハ用ヒケルトカ公ニモ是ヲウツシ重陽ノ宴トテ酒ニ菊ヲ入レテ用ユ
○重陽ハ
九月九日ノ節句
○長月ハ
陰暦九月ハ異稱赦免ノ使イノ此島ニ着キシハ九月ノ二十日頃ト平家物語ミユ
○竹葉トハ　酒ノ異名
○元是藥ノ水トハ
曾我物語ニ新酒百藥長トモ書ケリ云々

○醪酒ハ
美酒ヲ云フ此水モ如何デ美酒トナラザラントナリ
○山路谷水或ハ古ク(ヤマデ)(タニミヅ)ト讀ミシニハ非ルカ
○藥ト菊水　藥ハ聞クト云フヲ菊ニ掛ク
○赦免狀ハ
特赦ノ免狀長門本平家物語ニ其文ヲ擧グ爲ニ中宮御產御祈ニ依レ被レ行ニ非常大赦ニ薩摩方鬼界島流人　前左少將藤原朝臣成經　丞平判官康頼入道可レ令ニ歸參之由所レ候也依レ仰執達如件
治承二年七月三日
○罪モ同ジ罪云々　長門本平家物語ノ成經歸路ノ事ヲ記セル條ニ月モ同ジ月空モ同ジ空ノイカナレバ今宵ノ空ノテリマサルラントアル歌ノ詞ヲ借リタル成ベシ
○誓ヒノ綱云々
佛ノ衆生ヲ救ヒテ涅槃ノ彼岸ニ渡ラシメ給フ誓願ヲ綱ニ喩ヘシ語
○今生ヨリノ冥途ハ　此世ナガラノ冥途

○巻物ハ　赦免状ヲサス

○禮紙ハ　書状ノ上包ノ白紙

○セン方波ハ　セン方ナシヲ波ニ云イカク

○歸路ハ　歸京

右ハ謡曲俊寛之解題。謡方。梗概。辭解之内ヨリ近松門左衛門翁ノ作タル平家女護島二段目之切鬼界ヶ島之段ニ有ル文章ノ所ダケヲ書出ス義太夫之此段ニハ赦免使ノ丹左衛門尉基康ノ外ニ瀬之尾太郎兼安ト云フ武士ト海士ノ千島ト云フ娘ヲ作リ出シアル

○謡曲俊寛ニハ

ツレ　丹波ノ少將成經

ツレ　平判官康頼入道

シテ　僧都俊寛

ワキ　赦免使丹左衛門尉基康

右四名也

○たなつ物もなく　（穀　稻之特稱御園ニ播キツ穀類ノ總稱）

○憔悴枯稿　（ヤセツカルル）（ヤセヲトロウ）

（靖獻遺言ニ）

漁父辭曰屈原既放游ニ於江潭行吟ニ澤畔一顔色憔悴形容枯稿漁父見而問レ之曰子非ニ三閭ノ太夫一與何故至ニ於斯屈原曰擧レ世皆濁我獨清衆人皆醉我獨醒是以見放漁父曰聖人不レ凝滯於物而能與レ世推移世人皆濁何不下淈ニ其餔ニ其糟一而歠其醨上何故深思高擧自分放爲

（讀方）

漁父ノ辭ニ曰ク屈原既ニ放タレ江潭ニ遊ビ行ク澤畔ニ吟ズ顔色憔悴シ形容枯稿ス漁父見テ之ヲ問フテ曰ク子ハ三閭太夫ニ非ズヤ何ガ故ニ斯至ルト屈原曰ク世ヲ擧リテ皆濁リ我獨清メリ衆人皆醉ヒ我獨リ醒ム是ヲ以テ放タルト漁父曰ク聖人ハ物ニ凝滯セズシテ能ク世ト推移ス世人皆濁ラバ何ゾ其泥ヲ濁シテ其役ヲ揚ケザル衆人皆醉ハヾ何ゾ其ノ糟ヲ餔テ其醨ヲ歠ラザル何ガ故ニ深ク思イ高ク擧リ自ラ放タレシムルコトヲスルト

○九十九髪（ツクモガミ）（老嫗ノ白髪ノ江浦草（ツクモ）（水藻ノ名）ニ似タルヲ云フ語也）
古語伊勢
百年ニ一年足ラヌツクモ髪我ヲコフラシヲムカゲニ見ユ
此歌ニ依リテ九十九ヲツクモト讀ム
○綴（ツヅ）リサセテフ虫ノ音モ（其鳴聲恰モ衣ヲ綴リサセト云フ意ノ如ク聞ユルヨリ云フトゾ動物ノ名キリギリス今ノコホロギニ仝ジ）
古今
秋風ニホコロビヌラシ藤袴綴リサセテフキリギリスナク
○今ハ胡狄ノ一足（胡狄ハ北狄わびす即チ夷狄ノ八種わびすノ一門一族ト云フ事わびす夷狄）
源平盛衰記八蘇武ノ事ノ條
昔籠ニ巖穴之洞ニ徒送ニ三春之愁歎ニ今放ニ稽田之畝ニ空向ニ胡狄之一足ニ
設身留永朽ニ於胡國ニ前神還再仕ニ於漢ニ
○沖津波（テキツナミ）（沖ヨリ來ル浪之事）
○磯山（イソヤマ）（磯邊ニアル山之事）

○濱千鳥（ハマチドリ）（濱邊ニイル千鳥之事）
○忘ラレム時シノベトゾ濱千鳥行ヘモ知ラヌ跡ヲトドムル
○白波ノ打出ノ濱ノ濱千鳥跡ヤタエヌルシルベナルナラム
○鶉衣（ウヅラゴロモ）（ウヅラキヌ、ウヅラノコロモ、ウヅラゴロモ、怪シクハエモナキキレギレヲ集メテ綴リタルヲ鶉衣ト云フ、苟ニ衣如緑衣ト有鶉ノ體ノ短キ羽毛ニ被ハレタル樣襤褸ニ似タルヨリ云フ）
○諸阿修羅道（ショアシュラドウ）（佛敎ノ語阿修羅界之事、平家物語ニ見ユ）
○故在大海邊（出典不明智度論阿修羅生存ニ大海邊住）
○三惡（地獄餓鬼畜生）
○四趣（三惡ニ修羅ヲ加ヘテイフ）
○山田もらねど
（續古今女賓僧都）
山田守る僧都の身こそ悲しけれあきはてぬれば問ふ人もなし
○塩馴衣（シホナレゴロモ）（塩ヲ燒ク人ノ着ル衣）
古語　須磨の海士の塩燒衣馴れぬれど戀という物はわすれかねつも

塩焼衣ヲ塩馴衣トかよわせり

○がさみ（蟹之一種）

○あまの逆手

（新勅撰俊成）

いかにせん海士の逆手を打返し恨みてもなを飽ずもあるかな

○つげの小櫛もとるまもなく

（新古今業平）

芦の家の灘の塩焼暇なみつげの小櫛もさゝず來にけり

○玉かづら（かづらは蔓延してたへぬ物なるよりたへぬにかけて云ふ）

○汐じむ（朝氣ニ染ミテ濕フ物事ニナレシタシム）

○うらが様なめら（自分のよふな女自稱代名詞）

○歌連歌にべる（ぬめるの意か）

○むぞうか者（可愛いもの）

○ほや〳〵しやりめす（嬉しき形容）

○いもよ（妹よ）

○とせろ（こうせよ）

○かくせろ（あゝせよ）

○ざやつて（御意有ッテノ義）

○りんによがつて（イトシガッテ）

○小しをらしげな（ドコトナクシホラシイ事）

○綾羅錦繡（アヤトウスモノ詩歌美文ヲヨタスル人ノ心）

○汐ノ干潟（潮ノヒキ去リテ潟ト成タル所）

伊勢の海の入江の草の汐干潟海士もほたるの玉はひろわじ

○瑠璃の玉の盃（瑠璃楚語佛教語玉ノ類七寶ノ一色ハ種々有リト云フ特ニ紺色成瑠璃るりいろの略）

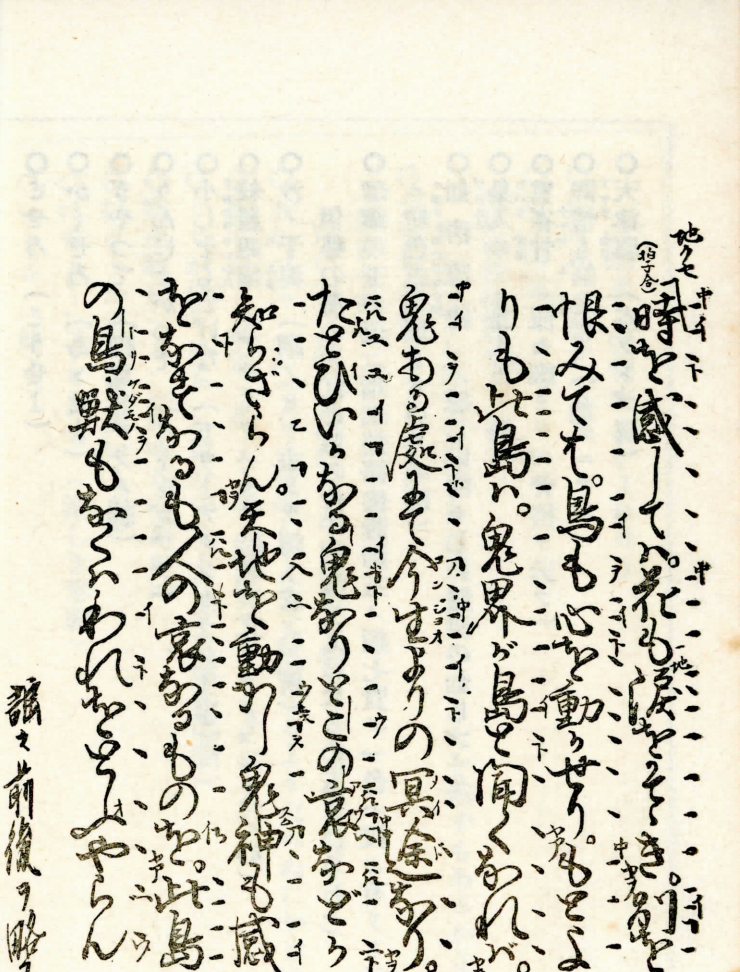
○如清涼池（涼しい清々しい靈池の如し）

○梟入め（梟入道ノ略）

○雲雀骨（痩セ細リタル骨格ヲ云フ）

○御情も無足し（ムダニナル）

○天津鴈（空ヲトブ鴈）



平家女護嶋

二段目の切

もとよりも此島は鬼界が嶋と聞なれば
鬼有所にて今生〻の冥途なりたとひい
か成鬼なりと此あはれなどかしらざら
ん此嶋の鳥獣物もなくわ我をとふやら
ん昔語るも忍ぶにも都に似たる物迚は
空に月日のかげ斗花の木草も稀なれば

耕し植ん五つのたなつ物もなく責て命
をつなげとや嶺より硫黄の燃出るを釣
人の魚にかへ波のあらめやひかたの貝
見るめにかゝる露の身は憔粹枯稿の九
十九髪肩に木の葉の綴させてふ虫の音
も枯木の杖によろ〳〵よろ〳〵と今は
都狄の一足と詫しも俊寛が身にしら雪

のつもるを冬きゆるを夏風の氣色を暦
にて春ぞ秋ぞと手を折ば凡日數は三年
の事とふ物は沖津波磯山嵐濱千鳥涙を
添て古郷へいつ廻り行小車のわだちの
鮒の水をこふ憂目も中〳〵に競苦しき
身の果の命待まぞ哀成り同じ思ひに朽
果し鶉衣に苔深き岩のかけぢをつた

ひをりわづらふ有様（ありさま）詞（ことば）ハァ我（われ）れもあの
姿（すがた）かや諸阿修羅道（しょあしゅらどう）故在大海邊（こざいだいかいへん）そも三悪（あく）
四超（しゅ）は深山海（しんざんうみ）づらに有（あり）と御經（ごきやう）にとかれ
しが知（しら）ず我餓鬼道（われがきどう）にや落（をち）けんと能々（よくよく）見（み）
れば平判官康頼（へいはんぐわんやすより）ァ、我（われ）も人（ひと）もかくも衰（おとろ）へ
果（はて）しかと心（こゝろ）も騒濱邊（さはぐはまべ）の苅（あし）かきわけ〳〵
くる人（ひと）は丹波少將成經（たんばのしょうつね）詞（ことば）なふ少將殿（しょうごのど）な
ふ康頼（やすより）こは俊寛（しゅんかん）か僧都（そうづ）かと招（まね）き合歩寄（あいあゆみより）
友（とも）なふ人迚（ひととて）は明（あけ）ても康頼暮（やすよりくれ）ても少將（しょう）〳〵三
人の外（ほか）なき物（もの）を何迚（なにとて）か音信（おとづれ）絶山田（たえやまた）もら
ねど世（よ）にあきし僧都（そうづ）が身（み）こそ悲（かな）しけれ
と手（て）を取（とり）かわし泣（なき）たもふ詫（かこち）は道理（ごうり）去（さ）
りながら康頼（やすより）は此嶋（このしま）に熊野（くまの）三所（さんしょ）を勧請（かんじょ）
し日参（にっさん）に暇（いとま）なし三人の友（とも）なひも此頃（このごろ）四

人に成たるを僧都は未御存じなきか何
四人に成りたるとは扨は又流人ばし有
つての事かイヤ左様ではなし少将殿こ
そ艶き海士の戀にむすぼれ妻を設給ひ
しといふより僧都莞笑と珍らし〳〵配
所三とせが間人のうへにも我うへにも
戀と云字の聞始笑ひ顔も是始殊更海

士人の戀とは大職冠行平も磯に見るめ
の汐馴衣濡始は何と〳〵俊寛も古郷に
あづまやと云女房明暮思ひ慕へば夫婦
の中も戀同然語るも戀聞も戀聞たし
〳〵語りたまへと責られて顔を赤むる
丹波少将三人互の身の上を包には有ね
共數ならぬ海士の茶船押出して戀と申

も恥しながらなふかゝる邊國波嶋迄誰
踏分し戀の道あの桐嶋の漁父が娘千鳥
といふ女世の營の塩衣汲も燒も夫は
まだ濱邊の業そりや時ぞと夕波に可愛
や女の丸裸腰にうけ桶手には鎌千尋
の底の波間を分て見るめかるわかめ海
帶あられもない裸身に鱶がぬら付鰡が

採かざみがつめる餌かと思ふて小鯛
が乳に喰付やら腰の一重が波にひたれ
て肌ゑも見へすく壺かと心得蛸めが臍
を窺ふうきぬしづみぬ浮世渡り人魚の
泳もかくやらん汐干になれば洲崎の砂
の腰だけ跟には蛤踏太股に蚶狹指
で鮑おこせば爪は蠣がいばいのふたあ

まの逆手を打休つげの小櫛も取間なく
螺の尻のぐるくわげも縁有目からは
玉かづらかゝる嶋へもいつの間に結ふ
の神の影向か馴そめなじみ今は埴生の
夫婦住夫を思ふ眞實の情深く哀知木
の葉を集縫綴計手利さ夜の寢醒は鹽
じむ肌に引寄聲こそはさつま訛世に睦

まじい睦言うらが様なめら歌連哥。にべ
る都人夢にも見やしめすまい縁有ばこ
そ抱て寢てむぞうか者共おもしやつて
たもりめすと思へば胸つぶしうほや
くしやりめす親もない身大事のせな
の友達康頼様は兄丈俊寛様は爺様と
拜たい娘よ。いもよ。とせろ。かくせろ。と

ぎやつてりんによがつてくれめせかしと
ほろと泣たる可愛さ都人のござんすよ
りりんによぎやつてくれめすが身にし
み渡ると語らるる僧都聞入り感にたへ
扨てく〳〵をもしろ扨て面白ふて哀でだてで殊勝で可愛ひ
戀先其君に見參いざ庵へ參らふかいや
即あれ迄同道千鳥く〳〵と呼れてあいと

芦かき分け竹の擔にめざし籠かたげた
ふりも小しほらしげな見めがよければ
身に着たるつづれも綾羅錦繡を恥ぬ形
はあたら物なぜに蜑とは生れけん僧都
も會釋の挨拶艶い　噂　承はつて感心康
賴はとく對面とな俊寛はけふ始め親と
賴度とや此三人は親類同然別してけふ

より親子の約束我娘　哀　御免蒙り四人
連で都入丹波少将成経の北の方と緋の
袴着るを待つ斗りェ、口惜い岩を穿土
を堀ても一滴の酒はなし　盃　なしめで
たいといふ詞が三三九度じやと云けれ
ばハァ此賤しい蜑の身で緋の袴とは親
罰かぶる事都人に縁を結ぶが身の大慶

七百年生る仙人の薬の酒とは菊水の流
それをかたどり筒に詰たも此嶋の山
水酒ぞと思ふ心が酒此鮑貝のお盃戴
きけふから彌々親よ子よ爺様よ娘よと
むぞうか者とりんによぎやってくれめ
せといへば　各　打笑ひ實　尤　と菊の酒
盛鮑はるりの玉の　盃　さいつさゝれつ

飲諷へ三人四人が身のうへを硫黄が嶋
も蓬萊の嶋に譬て汲共盡ぬいづみの酒
とぞ樂しける康賴沖を打詠めハア漁船
共覺へぬ大船漕くるは心得ずアレあれ
よ〳〵といふ中に程なく着岸京家の武
士の印を立汐の干潟に船つながせ両使
汀に上つて松影に床几立させ流人丹波
の少將平判官康賴やおはすると高ら
かに呼はる聲夢共わかず丹波少將是に
候俊寛康賴候と我先にとふためき走
り二人が前にハ、はつ〳〵と手をつき
頭をさげ蹲る瀬尾太郎が首にかけた
る赦文取出し是々赦免の趣拜聽有
れと押ひらき中宮御産の祈によつて

非常の大赦行はる鬼界が嶋の流人丹波少将成經平判官康頼二人赦免有ル所急ぎ歸洛せしむべきの條件のごとしと讀も終らず二人ハ、はっとひれ伏ばイヤなふ俊寛は何辻讀落し給ふぞヤア瀬尾程の者に讀落せしとは慮外至極二人の外に名が有るかサコレ是見よと指出す

少將判官諸共にヤア是はふしぎと讀かへしくりかへしもしやと禮紙を尋ても僧都共俊寛共書たる文字のあらばこそ入道殿の物忘れかそも筆者の誤りか同じ罪同じ配所非常も同じ大赦の二人は赦され我一人誓ひの網に洩果し菩薩の大悲大慈にも分隔の有りけるかとくに

捨身し死したらば此悲しみは有まじきにもしや〳〵とながらへて淺ましの命やと聲もおしまず泣給ふ丹左衛門懐中の一通出しとつく申聞かせんずれ共小松殿の仁心骨髄にしらせん爲暫らくは控へたり是聞れよと聲を上何々鬼界が嶋の流人俊寛僧都事小松の内府重盛公の

憐愍によつて備前の國迄歸參すべきの條能登ノ守教經奉つて件のごとし何三人共の御赦しか中々ハァハァはあと俊寛は眞砂に額を摺入レ〳〵三拜なして嬉し泣少將夫婦平判官夢ではないか誠かとおどつまふつ悦びは猛火にこげし餓鬼道の佛の甘露にうるほいて如

清涼地とうたひしもかくやと思ひやられたり両使詞を揃へ最早嶋に用もなし仕合せと風もよしいざ御乗船尤と四人船にのらんとす瀬尾千鳥を取て引退ヤア見苦しい女め見送りのやつならばそこ立去と脱付るィヤくるしからず此少将が配所の中チ厚恩の情を受夫婦と

成り歸洛せば同道と堅く申かわせし女御両人の了管を以て着船の津迄乗てたべ子々孫々迄此恩は忘れ置じと手をすって佗及へば思ひもよらずやかましい女め誰れか有るアレ引ずり退よとひしめいたりハテ了管なければ力なし此上は少将も此嶋にとどまって都へは歸るま

じサァ俊寛康頼船に乗られよいやく〳〵
一人残し本意でなし流人は一致我々も
歸るまじと三人濱邊にどうと座を組思
ひ定めし其顔色丹左衛門心有る侍
にて是瀬尾殿かやうにては君御大願の
妨女を船には乗せず共一日二日も逗
留しとつくと宥得心させ皆々心よくて

こそ御祈禱ならめといひも切らせずァ
アそりや役人の我儘船路關所の通り切
手二人と有る二の字の上に能登殿が一
点くわへて三人とせられしさへ私成
るに四人とはどなたの赦し所詮六はら
の御舘へ渡す迄は我々が預り乗らぬ迚
乗まいか俊寛が女房は清盛公の御意を

背き首討たれた有王が狼籍囚人同然の
坊主雑式共郎等共三人共船底に押込動
かすな 承 はると疋夫共千鳥を突退三
人の小腕取て引立〳〵獵人の餌籠に小
鳥をつむるがごとく捻付〳〵きびしく
守る瀬尾が下知船出せ〳〵乗り給へ左
衛門殿但し御使の外 私 の用ばし候か

と理屈ばれば力なく同じく船に乗移る
ふ便や濱邊に只ひとり友なし千鳥泣わ
めき武士はものゝ哀れ知るといふは僞り
よそら言よ鬼界が嶋に鬼はなく鬼は都
に有りけるぞや馴初し其日より御免の
便聞せてたべと月日を拜龍神に願立
祈しは連て都で榮耀榮花の望でなし簑

虫の様な姿を元の花の姿にしてせめて
一夜添寝して女に生れた名聞と是一つ
の樂しみぞやェ、むごい鬼よ鬼神よ女
一人乘せた迯輕い舟が重らふか人々の
歎を見るめはないか聞く耳は持たぬか
乘てたべなふ乘おれと聲を上打招き足
摺しては臥轉び人目も恥ず歎しが蜑の

身なれば一里や二里の海こはいとは思
わね共八百里九百里が游も水練も叶ね
ば此岩に頭を打當打碎き今死ぬる少將
樣名殘惜いさらばや念佛申むぞうか者
りんによぎやつてくれめせとなく〳〵
岩根に立寄ばやれ待々と俊寬よろぼひ
〳〵艇を漸轉び走寄りァヽコレ船に

乗せて京へやる今のを聞たか我妻は入道殿の氣に違ふて切れしとや三世の契りの女房死せ何樂しみに我獨り京の月花見たふもなし二度の歎を見せんより我を嶋に殘しかわりにおことが乗てたべ時には關所三人の切手にも相違なく又お使にも誤りなし世に便なき俊寛我を佛になすと思ひ捨置て船にのれ〳〵となく〳〵手を取引立〳〵御両使偏に頼存る此女乗てたべとよろぼひ寄ば瀬尾太郎大きに怒り飛でおりャァ梟入め左様に自由に成ならば赦文もお使も詮なし女は迚も叶はぬうぬめ乗といがみかゝればそれはあまり了管なしとか

くお慈悲と欺し寄り瀬尾が指たる腰刀
抜て取たる稲妻や弓手の肩先八寸斗り
切込だりうんとのれ共遖の瀬尾指ぞへ
抜て起直り打てかゝるもひよろ〳〵柳
僧都は枯木のいざり松両方氣力渚の砂
原踏込踏ぬき息切れ聲を力にて爰をせ
んといどみあふ船中騒げば丹左衛門舳

板に上り御帳面の流人と上使との喧嘩
落居の首尾を見届けて言上する下人成
りとも助太刀すな脇より少しも構ふな
と眼もふらず見分す千鳥絶兼竹杖ふつ
て打かくる僧都聲をかけヤアコリヤ寄る
な〳〵杖でも出せば相手の中科は遁れ
ぬ指出たらば恨ぞといかれは千鳥もせ

んかたなく心斗りに身をもんだり血まぶれの手負とうへにつかれし痩法師はつしと打てばたぢ〳〵〳〵刀につられ手はぶら〳〵組はくんでもしめねば左右へひよろりと放れ砂にむせんで片息の兩方危く見へけるが瀬尾が心はう へ見ぬ鷲摑かゝるを俊寛が雲雀骨には

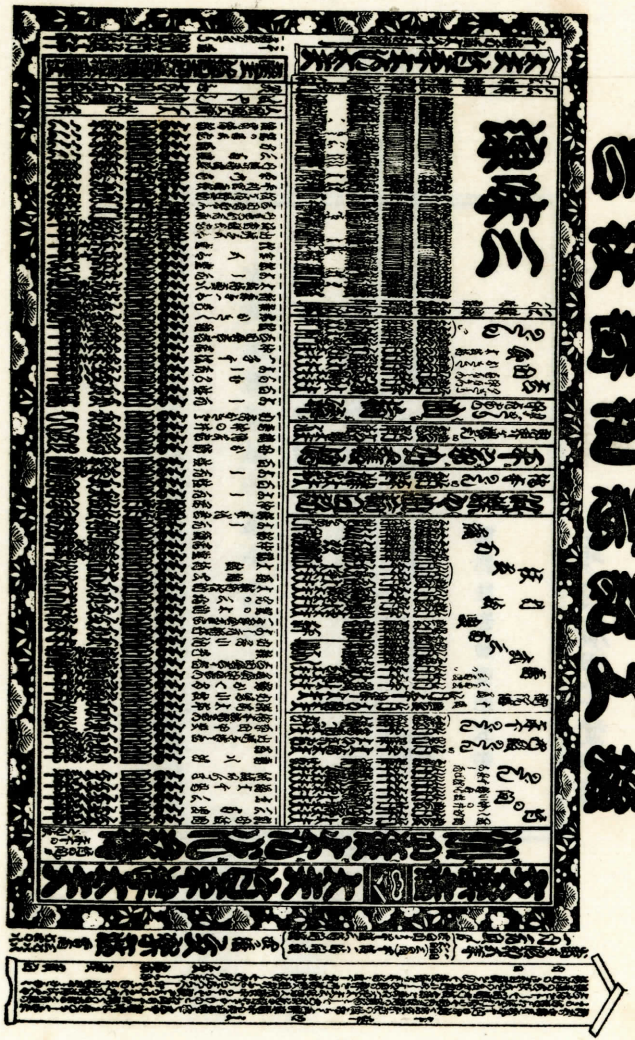
つたと蹴られかつぱと伏ばはい寄つて馬乘にどうど乘たる刀とどめをさゝんとふり上る船中ゟ丹左衞門勝負は急度見屆けたとゞめをさせば僧都の誤り科重なるとどめさす事無用〳〵ヲ・科重なつたる俊寛嶋に其儘捨置れよいやく御邊を嶋に殘しては小松殿能登殿

の御情も無足し御意を背く使の越度殊
に三人の數不足しては關所の違論叶ひ
がたしと呼はつたるされぞ〳〵康頼少
將に此女をのすれぞ人數にも不足なく
關所の違論ふき所小松殿能登殿の情に
て昔の科は赦され歸洛に及ぶ俊寛が上
使を切たる科によつて改て今鬼界が

嶋の流人とふれぞ上御慈悲の筋も立お
使の越度聊ふしと始終を我一心に思
ひ定めしとどめの刀瀬尾請取れ恨の刀
三刀四刀しゝぎる引切首押切て立上れ
ぞ船中わつと感涙に少將も康頼も手を
合たる斗にて物をも云ず泣居たり見る
に付聞に付千鳥一人がやる方ふさ夫婦

は來世有物よわしが未練で思ひ切のふ
い故嶋の憂目を人にかけのめ〳〵船ふ
乘れうか皆様さらぞと立歸る縋りとど
めてアヽコレ我此嶋にとどまれぞ五穀ふ
離し餓鬼道ふ今現在の修羅道硫黄の燃
るは地獄道三惡道を此世で果し後生を
助てくれぬか俊寛が乘は弘誓の船浮世

の船には望ふしサア乘てくれ早乘と袖
を引立手を引立〳〵漸に抱乘けれぞ詮方
波に船人は纜といて漕出す少將夫婦
康頼も名殘惜やさらぞやといふより外
は涙ふて船よりは扇を上陸〳〵は手を上
て互に未來で〳〵と呼はる聲も出船
に追手の風の心ふく見送るかげも嶋が



くれ見へっかくれっ汐ぐもり思ひ切て
も凡夫心岸の高見にかけあがりつま立
て打招き濱の眞砂にふしまろびこがれ
てもさけびても哀吊ふ人迚も鳴音は
鷗天津鴈さそふはおのが友千鳥一人を
捨て沖津波幾重の袖やぬらすらん

大阪市西成區粉濱中之町
四丁目百參拾六番地
豐竹古靭太夫事
金杉彌太郎
電話住吉參壹四五番

島内廣田八千堂印行

古

古